

舞妓 Haaaaan!!!

2007(平成19)年4月17日鑑賞(東宝試写室)



監督=水田伸生/脚本=宮藤官九郎/出演=阿部サダヲ/堤真一/柴咲コウ/吉行和子/真矢みき/小出早織/京野ことみ/酒井若菜/生瀬勝久/北村一輝/伊東四朗/特別出演=植木等(東宝配給/2007年日本映画/120分)

……ケツタイなタイトルどおり、舞妓と野球拳が命という阿部サダヲ演ずるケツタイな主人公がくり広げる「舞妓はん絵巻」は、楽しさいっぱい。バカバカしさも計算されたキャラクター喜劇のうちとばかりに、宮藤官九郎の脚本は冴えを見せ、ライバルとなるプロ野球のスター選手を演ずる堤真一も、主人公と同僚の彼女を演ずる柴咲コウも、ケツタイなキャラを熟演……。これを機会に「お茶屋遊び」を始めるのもいいが、「1回のお座敷代は、銀座のクラブよりもリーズナブルです」という言葉をどう受け止めるかは、自己責任で……。

はじめて観た宮藤官九郎の世界！

脚本家宮藤官九郎という名前はよく聞いていたし、『真夜中の弥次さん喜多さん』(05年)で彼が長編映画監督としてデビューしたことも知っていた。しかし、私はホラー映画とともに、ギャクだけのアホバカ喜劇もあまり好きでなため、これは観ていない。もっとも『GO』(01年)の脚本も書いているのだから、決してアホバカ喜劇だけの脚本家ではないのだろうが……。

今回の『舞妓 Haaaaan!!!』もタイトルからしてあまりにもアホバカ喜劇的だから、あまり観る気がしなかったが、柴咲コウや堤真一が出演しているため、やはり観ておこうと思ったもの。したがってこの映画の主演が堤真一や柴咲コウではなく、宮藤作品に欠かせない個性派俳優阿部サダヲだということも知らなかったし、もし知っていたら観に行っていなかったかも……？

しかし、そんな私の事前の迷いは杞憂だった。つまり、私ははじめて観た宮藤官九郎の世界の楽しさにすっかりハマってしまい、試写終了後、トイレで並んでおしっこをしながら、浜村淳さんと「たまにはこんな楽しい映画で笑うのもいいですね」という会話を交わすことに……。気分転換になる映画は、必ずしも『釣りバカ』シリーズに限らないことを実感……。

水田監督の面白いコメントにも感心！

プレスシートにはこの映画が長編映画2作目となった水田監督のコメントがのっているが、それによると、この映画は水田監督が宮藤官九郎に「京都の花街を題材に何か書いてみない？」と持ちかけたことによって生まれたとのこと。また、キャスティングについての水田監督のコメントが面白い。

それは、喜劇にキャラクターコメディとシチュエーションコメディがあるとなれば、三谷幸喜脚本は后者で、宮藤官九郎脚本は前者だという分析。そんな水田監督の分析どおり、宮藤官九郎はこの映画で、京都と舞妓と野球拳にあこがれ、それしか愛せないというケツタイな主人公鬼塚公彦のキャラクターを見事につくりあげたというわけだ。そんな「キャラクター命」の脚本においては、それを演じる俳優を誰にするかが決定的なポイント。しかして、当然のように白羽の矢が立った阿部サダヲの熱演ぶりは……？

お座敷遊びは、究極の男の夢……？

鈴屋食品の東京本社で働く平凡なサラリーマン鬼塚公彦が京都と舞妓と野球拳にあこがれたのは、高校時代に修学旅行で京都を訪れた時のある出来事から。それは、団体からはぐれて迷子になった鬼塚がなぜか舞妓の小梅（京野ことみ）に助けられたため。つまり鬼塚の少年心（スケベ心）に、この世のものとも思えない舞妓の美しさにハマってしまったというわけだ。小梅は京都駅までの道を教えたただけだが、それに味をしめた（？）鬼塚は、その後10人ほどの舞妓はんと話をするため、次々と同じように京都駅への道をたずねたというから、鬼塚のおませぶりもかなりのもの……。しかも大人たちが興じている野球拳を見て、その時「大人になったら自分のお金で舞妓と野球拳をするんだ!!!」ということが一生の

目標になったというから、この主人公は相当なバカ……。

他方、現実には現実。今、鬼塚ができる楽しみは、なけなしの給料をはたいて京都に通い、舞妓の写真を撮っては、自分の開設するホームページにアップすることくらい。当然ペーペーのサラリーマンにとっては、京都のお茶屋でのお座敷遊びなど夢のまた夢。鬼塚は何とか1度は、と心の底から願っているが、2、3回お茶屋遊びを経験したことのある(?)私に言わせれば、お座敷遊びってホントに究極の男の夢……？

クラブ遊び vs. お座敷遊び、どちらが面白い……？

この映画のプレスシートはかなり凝った装丁になっているうえ、何と「京都ロケ地マップ」が貼り付けられており、それを広げると、この映画に登場する花街・夢川町のロケ地となった宮川町や上七軒の歌舞練場をはじめ舞妓に関する情報がいっぱい。そしてお茶屋でのお座敷遊びの1回のお座敷代は「銀座のクラブよりリーズナブルです」と紹介されている。しかし大阪北新地のクラブだってピンキリだから、東京銀座のクラブはそれ以上……？ したがって「銀座のクラブよりリーズナブル」という、いかにも京都的あいまい表現に油断して「それなら、俺も……」と考えて出かけると、ひょっとしてエライ目に遭うかも……。



©2007「舞妓 Haaaan!!!」製作委員会

一流のスター選手は、遊びも一流……？

こんなしがないサラリーマン鬼塚の舞妓はんホームページを荒らすように入ってきたのが、「ナイキ」なる人物。したがって、そんな2人の第1ラウンドの戦いは、ネット上のチャットによる誹謗中傷合戦……。この「ナイキ」が、年俸8億円の花形プロ野球選手、内藤貴一郎（堤真一）であることが判明した後は、さらにハチャメチャな第2ラウンド、第3ラウンド……そして最終ラウンドのバトルが展開されるから、それにご注目！

堤真一の大阪弁は、『難波金融伝ミナミの帝王』シリーズの顔である竹内力が演じる金融業者、萬田銀次郎と同じように迫力があるが、やはり元がハンサム系だけに、ほどよいガラの悪さとなっており、適役……。しかし、いくら花形スターであっても、まっ昼間からお茶屋で多くの舞妓、芸妓をお座敷にあげて遊んでいたのでは、うの目たかの目でスキャンダル探しをしている三流芸能誌にたたかれて、ヤバイのでは……？

柴咲コウは控え目に……？

阿部サダヲはこの映画が初主演だが、柴咲コウは既に多くの主役を張っている大女優。したがって格や出演料で比べれば、この2人は月とスッポン……。ところがこの映画では、意外なことに柴咲コウ演ずる鬼塚の同僚OL大沢富士子は簡単に鬼塚から振られてしまうという珍しい役。これでは一流女優のプライドが許さないのでは、とつい心配してしまうが、なぜか柴咲はそんな役をきっちりと……。

もっとも、タダでは起きないのが一流女優であることの証拠……。そんな柴咲演ずる富士子は、鬼塚が抱く野望と同じように、「私だって、舞妓になってやる！」とこれまたバカな決心をして1人京都へ出かけていったからビックリ。そんな富士子を迎え入れたのが、置屋「ななふく」の「おかあさん」さつき（吉行和子）と「おねえさん」の駒子（小出早織）。舞妓になるのはふつう15歳から20歳までで、富士子のような24歳という年増では絶対無理なはずだが、そこはマンガみたいな映画のこと。「仕込み」から「見習い」へそして「お店出し」へ、富士子は順調に階段をのぼっていくかに見えたが……？

「一見さんお断り」vs.「お金があれば、何してもかまへんねん！」

「かやく工場」と呼ばれる京都支店に転勤してきて大喜びの鬼塚は、ちゃっかり先崎部長（生瀬勝久）に歓迎会をおねだりして実現させたが、その舞台は同じ宮川町（夢川町）でもお茶屋ではなく、カラオケ店……。それに満足できない鬼塚は、ならば自前でとばかりに通帳から金を引き出し、スーツを新調して、意気揚々とお茶屋デビューをもくろんだが、お茶屋「卯筒」の女将こまつ（真矢みき）からは「一見さんお断り」とシャットアウト！ この映画では、京都のお茶屋特有の「一見さんお断り」が大きなテーマとされているが、さて、その建前と本音のギャップは……？

他方、一流のプロ野球選手でありながら、かなりガラの悪いお茶屋遊びをくり広げている内藤は、「お金があれば、何してもかまへんねん！」とほざいて、舞妓の胸の中に手を差し入れたり、宮川町（夢川町）で1番人気の舞妓豆福（酒井若菜）のダンナになったりしていたが……？

社長はさすが遊び上手かつ人使い上手……？

京都発のベンチャー企業で大成長したのは、京セラや任天堂そしてワコールなどだが、鈴木大海社長（伊東四朗）率いる鈴屋食品もそんな感じ……？ そして、京都発のベンチャー企業の社長がお茶屋の常連客であるのは当然で、さすが鈴木社長クラスになると遊び上手……？

そんな鈴木社長は人使いも相当上手で、「お茶屋遊びは10年早い」と鬼塚に対してお茶屋デビューを禁じた鈴木社長は、続いて、「仕事で結果を出せば、好きなだけお茶屋に連れて行ってやる！」と宣言したから、単純な鬼塚はその言葉に大発奮。鬼塚が京都発のオリジナルカップめん「あんさんのラーメン」を完成させたのは、そんな鈴木社長のハッパかけのおかげ……。

この新商品のヒットにより、鈴屋食品は大きな利益をあげるようになったため、鬼塚は鈴木社長に連れられて晴れてお茶屋デビューを果たすことに。社長はさすが遊び上手かつ人使い上手……？

■ しんみりする人生ドラマも少しは……？

宮藤脚本の冴えているところは、アホバカ喜劇的なノリを基調としながら、そこにもいかにも京都の花街にありそうなお涙頂戴式の物語を少しだけ絡めているところ……。その1つは「ななふく」の置屋を舞台に展開される、さつきと駒子そして内藤の物語だから、是非注目を。

そしてもう1つは、鬼塚と富士子との恋模様。いくら「白塗り」しているからといっても、すべてを知っている(?) かつての恋人が舞妓として登場し、目の前で話をしていてもその正体がわからないという鬼塚の鈍感さにはあきれるばかりだが、鬼塚は内藤に対抗して駒子のダンナになりたかっただけ……。そして、富士子との恋はホントに破綻しているの……。そんな人生ドラマを少しはしんみりと考えてみるのもいいのでは……？

2007(平成19)年4月18日記

ミニコラム

『祇園小唄』より『京都の恋』、『千年の古都』……？

「月はおぼろに東山 霞む夜毎のかがり火に……。これはご存知(?) 『祇園小唄』の歌い出し。司法試験の合格者が1800名となった今、弁護士バッジをつけても、京都の祇園や上七軒でのお座敷遊びは、夢のまた夢？ しかし合格者500名の私の若い頃は、1年に1度はお座敷でのプライベートな食事会があったもの。また、○○会や△△会という団体のお座敷では、『祇園小唄』の踊りが定番。しかし、これってそんなにいいもの？

67年に始まった私の大学時代はベン

チャーズの全盛時代で、それを京都風にアレンジ(?) したのが、渚ゆう子が歌った『京都の恋』。「チントンシャン」のお囃子より、「テケテケテケケ」のエレキのリズムの方が身体に馴染む私は、お座敷よりも二次会のカラオケ合戦の方が好き。そんな京都のカラオケバーで歌うのは、昔は『京都の恋』、その後は都はるみの『千年の古都』。「歌は世に連れ、世は歌に連れ」と言うが、あなたはあくまで『祇園小唄』、それとも……？

2007(平成19)年7月9日